コ　ラ　ム

コーニング滞在記

コーニング研究所　加工研究開発
小 野　俊 彦

Staying in Corning

Toshihiko Ono
Finishing R&D, Corning Technology Center

昨年の八月から今年の八月まで丸一年間，会社内のプロジェクトに参画するためアメリカのコーニング市にあるコーニング社の中央研究所，サリバンパークに赴任した。研究内容は最新の開発業務であったため残念ながら書くことができないが，一年間，アメリカ NY 州のコーニングに住んで感じたことを思いつくままに書くことにする。

コーニング市は NY 州内のペンシルバニア州との境に近いところにある。北緯は室蘭とほぼ同じ，42 度である。冬になると雪は比較的少ないのだが，氷点下 10 度はあたりまえの世界になる場所である。滞在期間中は幸運にも暖冬であったので快適であった。

今回の赴任は，家族全員で移動することとなった。アメリカ側の受け入れ担当の強い勧めによるものであった。アメリカの基本的な生活の中心は家族である。家族あっての仕事，仕事はあくまで生活の糧を得るための手段であるから，家族と仕事のどちらを選ぶかといえば，間違いなく家族のことを優先する。地域のつながりも，このような家族単位の行動に基づくので日本とは大違いであった。地域の行事と家族の行事では家族優先である。家族が別々に一年も住むということはアメリカ人には考えられないらしい。家族を大事にすることは見習うべきだと思った。

出発前は手際の悪さも手伝って非常にあわただしかった。一番時間を割いたのは，一番悩んだことである，子供になんと説明していいものか，ということであった。子供は二人いて上の娘が地元の幼稚園に入りたてであった。転出，転入はさほど問題ないとはいえ，入園してから 4 ヶ月，毎日のように近所の子供たちと遊ぶことを一番の楽しみにしている娘に，一年間も友人と会えなくなることを伝えるのはつらかった。その前にアメリカも知らない，会えなくなる，ということも知らない，知らないづくしの人に対して，伝えるべき内容をわかりやすく説明し，理解してもらい，納得してもらうことの難しさは，研究内容の発表に通ずる気がした。

準備しなければならないことに関しては，かなりの情報をインターネットから得た。普段は他人のホームページにある日記などには目もくれないのだが，このときばかりはじっくりと見させてもらった。経験者のコメントは非常に役に立った。

いざ出発の日はこれまた大仕事であった。手荷物は最小限にしたとはいえ，子供は寝てしま

〒437−1397　静岡県小笠郡大須賀町大渕 12117
TEL: 0537−48−1816
FAX: 0537−48−5754
E-mail: onot@corning.com

写真 1　住んでいたアパート

写真 2　ナイアガラの滝　アメリカ側より

うと“置く事のできない荷物”とおなじである。駅や空港の移動は大変であった。さらに飛行機の中は，大人でも退屈する空間と時間なのに子供にとってはどれほどのものか想像しようがない。よく我慢してくれたと感謝したい。

着任当初，家財道具が到着するまでの間一番困ったのは食事であった。一週間外食して，さっぱりしたものがないことに気がついた。舌が合わないわけではないのだが，毎日続けるとこたえる。量の多さにも閉口した。残すことをよし，と考えられるようになることはかなり抵抗があった。家財道具がきてからは，妻が毎日和食を作ってくれたので無病息災で過ごすことができた。心から感謝である。

アメリカでの生活は非常に快適であった（写真 1）。アパートは空間をふんだんに使っているので開放感があった。建物と道路以外の空き地には必ずといっていいほど西洋芝が植えられていて，土が剥き出しになっているところがほとんどなかった。またその管理も行き届いていて，芝刈りは日本人が洗車をするのと同じくらいの頻度でしている。公共の区域もされている。学校のグランドも同様である。土のグランドと違い，子供が汚れや怪我を気にせずに転がることができるし，土ぼこりも出ないので是非日本の学校でも，と思った。

唯一誤算だったのはテロの影響で旅行はほとんどできなかったことである。逆にそのおかげで地元の名所を満喫しながらの生活ができた。ニューヨーク市まで車で 5–6 時間（3 時間半で行く人もいるが），ナイアガラの滝（写真 2）まで 2 時間半，チョコレートの町ハーシーズパークまで 4 時間，ニューヨークワインのワイナリーが並ぶフィンガーレイクまで一時間程，そのほか，ロチェスター，シラキュース，アルバニーなど，日帰りの小旅行には事欠かなかった。また，ガラス屋冥利に尽きるのは，コーニングガラス博物館（Corning Museum of Glass）がすぐそばにあったことである。来客があるたびに，またイベントがあるたびに訪れたが，何回行っても飽きない。芸術的な面だけにとどまらず，工業的，歴史的な点でも興味は尽きない。

週末のスーパーでの買い物では，アメリカの経済が消費主義に基づいていることを実感した。まず陳列している品数と量がすごい。さらに安い。大量に作るから安くなる。作ったからには使わないと経済が回らない。使ったらどんどん捨て，新しいのを買う。日本では土地に限りがあるのでごみを捨てること自体大きな問題となるので，どんどん買ってどんどん捨てる，というアメリカ的な経済は成り立たないはずである。しかしながらビジネスのスタイルはアメリカ的である。

仕事の環境について一番感心したのは，女性が生き生きと働く姿を見る機会が多い事であ

る。共働きをする家庭が多いともいえる。これは託児所のシステムが整っているので子供の心配をせずに仕事に打ち込める事が一番貢献しているようである。コーニングの主要な建物の近くには必ず Day Care Center（託児所）があり，仕事の間，子供の面倒を見てくれる。

コミュニケーションは想像以上に難しかった。アメリカにおけるコミュニケーションの基本は，思いをしゃべることである。とにかく声に出してしゃべる。「目で会話する」とか「あ，うんの呼吸」など期待することはまちがいである。いいたいことや思ったことがあったら迷わずに声に出すなり手紙にしたためるなりして“発信”しないと，伝わらないかもしくは何も考えていないと思われる。日本では学会などの質疑応答で，こんなこと聞いたら恥ずかしい，素人と思われる，時間もないことだし，と，聞きたいことがあっても聞かない方が多いと思われる。これをアメリカでやるとどんどん取り残されることになる。その道の専門家に対して素人質問をすることは恥どころか，逆に歓迎される向きもある。質問を受ける側はひとつの領域にのめりこんでいるので，外からの視点が新鮮に映り新たな発想につながるらしい。もっとも，聞く前に自分の考えをもたなければならないことはいうまでもない。自分の考えは質問するときのみならず質問を受ける際にも要求される。聞かれて，しばらく黙ってアー，うー，ではそのうち誰も聞かなくなる。よく言われたことのひとつに，「アメリカ人が質問の答えを待てるのは 2.8 秒まで。」ということがある。本当である。3 秒以内に何か声を発しなければ待ちきれずに次の質問に移るか，「あっそう，それではまた」ということになる。質問をするのに困り，質問を受けるのにも困った。（実際は，日本人で英語がうまくないだろうから，ということで気長に待ってくれたので助けられた。）

意思表示の重要さは仕事以外でも同じであった。「いついつパーティーをするが，くるか？」と聞かれて，「行く」と返事をしたものの場所と時間の案内がこないので出席できなかった，ということがあった。「行く」だけではだめな様である。場所や時間，何をするのかなどたっぷりと質問をして，興味だけでなく「本当に行きたい」という事を示さないとそれまでである。

また，アメリカ人という人種はいないのは分かってはいるのだが，今まで何を持ってアメリカ人といっていたのか，改めて考えさせられた。アメリカ国民の出身国は実に多岐にわたる。人種の坩堝とはよく言ったものである。当然，発想や考え方，物事の捉え方の違いも多岐にわたっている。「普通はこう考える」，とか，「普通だったらこうする」，が根底から覆されることになる。この基本的な事が身にしみて分かるまでにかなり時間を費やした。「やってくれるだろう」，とか，「ここまではするはずだ」，などの「推測」は禁物である。日本では，誰が何をいつまでやる，ということをあまりはっきり決めなくても，期限までに何とか目標を達成できる。これは事細かに決めなくても相手の考えていることや，しなければならないことが大体推測できるからである。この方法はアメリカでは成り立たない。先に述べたように，考え方や捕らえ方が異なる人々がチームとして働くためには，否が応でも事細かに決めていかないと出てきたものが期待したものと違って，何も結果が得られないことになる。

長いと思っていた赴任期間も終わってみればあっという間の一年であった。要領を覚えたか，と思ったらもう帰国である。子供も片言の英語を話すようになり，覚えるスピードの速さに驚いていたのもすでに半年も前の話となった。この赴任計画を遂行，サポートしてくださった会社の関係者各位に，そして一緒にアメリカで暮らしてくれた家族に感謝する。